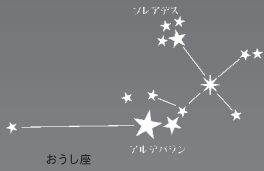


ポラリスを仰ぐ北の大地から



親雪のとき

上川北部医師会 会長 吉田 肇

北国の遅い夜明け、雪煙の中に瞬く除雪車の回転灯、朝日を受け、繊細なガラス細工のようにきらめく霧氷、月明かりの雪道。寒さを忘れてその美しさに見入るのは、雪国に暮らす者にのみ許される至福の一時です。

今年度名寄市では12月のジャンプ大会を皮切りに全国中学スキー大会など全日本クラスのスキー大会が数多く予定されています。「雪質日本一フェスティバル」が正式名称の雪まつりでは、地元の自衛隊による大雪像の他、海外のプロアーティストと国内の美大生による雪像彫刻が製作され、夢のように美しい雪像の出来栄を競います。その傍らには市民による「おらの雪像見てくれコンテスト」のさまざまな雪像が並びます。名寄地方スキー連盟会長であり、なよろ観光まちづくり協会の会長を務める私は、冬の間を忙しく過ごします。

「利雪・親雪」は造語ですが「利雪」は各分野で研究が進んでいます。私に関わっているのはもっぱら「親雪」の方で、雪に親しみ冬を楽しく健康的に暮らすにはどうしたらいいかと考えるのが役目です。雪景色は確かに美しいものですが、日常生活を送る上で雪には難儀しますし、寒い冬の楽しみは決して多くありません。それを逆手にとってるのがハンディキャップスキー、障害者のスキーです。足が不自由で走れない人がスキーで風を切り、視覚障害者が障害物のない雪面のコースを思い切り滑走していきます。

40年前、日本にハンディキャップスキーをもたらした、ヒゲの殿下の愛称で親しまれた寛仁親王殿下のご長女彬子女王殿下が2月に名寄にお成りになって、全道ハンディキャップスキー大会が開かれます。障害者が雪とともに至福の時を過ごすこの大会こそ、なによりの「親雪」であると思います。

「スキー万歳！シーハイル！」



正月雑感

留萌医師会 会長 川上 康博

正月、久しぶりに息子家族とニセコで温泉とスキーを楽しみました。ますます外国人が増えたように感じました。学生時代スキー場の昼ごはんと言えばラーメン、豚汁、カレーライスくらいしかなかったように思いますが、この度はフランスパンのオムレツサンドイッチなる物をコーヒーと共に食べました。周りを見ると日本人は私達家族のみで異国感に溢れていました。子ども達が小さいころ、正月にスキー場へ私の父を連れて行き、父は温泉三昧、私達はスキー三昧だったのがついこの間だったような感じがしましたが、息子の姿を見ると時がたつ速さをひしひしと感じました。

年末北海道保険医新聞の、札幌市医師会（札幌医）と保険医会との懇談会で、日本医師会は消費税問題について病院には仕入れ税額控除を導入し、診療所には診療報酬改定で増額分の上乗せを検討しているという記事を読み、どうしたことかととても気になりました。一方札幌医では病院は課税、診療所は非課税では国民の理解を得られない。10%増税時に課税制度に改め、患者負担増につなげないとの改善案を示しています。これから私のまわりで起こるさまざまなことに対処するには年々衰える体力智力の維持に努めねばと、ニセコの温泉につかりながらしみじみ思いました。